

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会

Studies on the Cultures and Societies in Premodern Inner Asia and its Adjacent Areas

2. 研究代表者氏名

稲葉 穰

Inaba, Minoru

3. 研究期間

2019年4月-2022年3月(2年目)

4. 研究目的

いわゆる古代文明発祥の地であり、伝統的に独自の歴史文化を形成してきたとみなされる西アジア、南アジア、東アジアは地理的には海上と内陸アジア（中央アジア、中央ユーラシアとほぼ同義で用いる）の陸上ルートを通じて様々な形で接触してきた。その接触の場を提供し、時にこれら大陸縁辺の世界に多大な影響をおよぼした内陸アジア世界もまたそれらの地域と同等に一つの文化世界、歴史世界であるかのように措定されてきたが、そのイメージは砂漠とステップと遊牧部族が支配的な空間、というものであった。しかし20世紀末にソヴィエト連邦が崩壊し、パミール以西の内陸アジアが世界の研究者に対して門戸を開き、また東トルキスタンにおいて中国の非常に活発な研究が進んだことにより、当該地域を研究するための材料や視点は漸次増大してきている。このような状況を踏まえ、今後進められねばならないのは、上述のようにステレオタイプの理解されてきた内陸アジア内部の地理的な diversity や、社会結合のあり方、都市に関するより詳細な研究である。本研究班は古代から近代に到る内陸アジアとその隣接地域に関する様々な社会研究、文化研究のケーススタディを積み重ねることで、多様な内陸アジア像を描き出し、ステレオタイプの理解の克服を目指す。

West, South, and East Asia, traditionally regarded as "civilizational centers", have been in contact with each other through maritime and inland routes. Inner Asia (almost synonymous with Central Asia/ Central Eurasia), which served as a contact zone for these areas and at times greatly influenced them, has also been perceived as an independent historico-cultural world. Even today, the common image

of Inner Asia is one of deserts and steppes where monolithic, nomadic tribal societies and cultures prevail. However, starting with the last two decades of the 20th century, materials for further researching the history of the area in question have started to become increasingly available. Based on such materials, the issue of the diversity of societies and cultures within Inner Asia has been attracting more and more attention. The purpose of our research project is to shed light on the history and culture of Inner Asia through case studies of its societies and cultural interactions, etc. from antiquity to the early modern period.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、対面式での研究会を開くことが困難となった。そこで基本的にオンラインにて、課題としている資料である 11 世紀の Fami によるペルシア語地方史『ヘラート史』の新発見写本の会読を中心として研究会を運営した。オンラインでの開催は史料会読にとっては利点もあり（各参加者が自分の研究室にある研究資源を随時利用できるなど）、予想以上にうまく運営できたと考えている。一方研究発表の方はオンラインもしくはハイブリッドでの開催は一回に留まっているが、これは会場までの移動にかかるリスクや、ハイブリッド型の研究会を行うための環境整備が不十分であることなどから、改善の余地は大いにあると考えている。

6. 本年度の研究実施内容

- 2020-05-08 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 角田哲朗 京都大学大学院文学研究科 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰
- 2020-05-22 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰
- 2020-06-12 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰
- 2020-06-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰
- 2020-07-10 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 タルマシリーン・ハンの時代-チャガタイ・ウルスのイスラム化をめぐって- 発表者 川本正知 奈良大学
- 2020-07-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 国際ワークショップ Remains and Memories of Buddhists in Islamizing West Asia コメンテーター 稲葉穰
- 2020-09-25 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 稲葉穰 ヘラート史会読 発表者 小倉智史 東京外国語大学
- 2020-10-23 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会読 発表者 小倉智史 東京外国語大学

2020-11-14 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 パンジャーブ北部土着集団の千年 発表者 小倉智史 東京外国語大学
2020-11-27 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 中西竜也
2020-12-11 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 中西竜也 ヘラート史会誌 発表者 稲葉穰
2021-01-22 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 稲葉穰
2021-02-12 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 角田哲朗 京都大学大学院文学研究科
2021-02-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 杉山雅樹 京都外国語大学
2021-03-26 前近代内陸アジアとその隣接地域の文化と社会 ヘラート史会誌 発表者 川本正知 奈良大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

7月26日、科研費基盤研究A「グプタ朝期以降のインド仏教の僧院に関する総合的研究」(代表:久間泰賢氏)の主宰する国際ワークショップ「Remains and Memories of Buddhists in Islamizing West」(オンライン開催)を共催し、班長である稲葉が、Convenerとして参加した。

8. 研究班員

所内

船山徹、稲本泰生、中西竜也、宮本亮一

学内

檜山智美(白眉センター)、井谷鋼造(大学院文学研究科)、吉田豊(文学研究科)、帯谷知可(東南アジア地域研究研究所)、内記理(文学研究科)、角田哲朗(文学研究科)、今松泰(アジア・アフリカ地域研究研究科)

学外

大津谷馨(リエージュ大学)、川本正知(奈良大学)、和田郁子(岡山大学)、入澤崇(龍谷大学)、小野浩(京都橘大学)、真下裕之(神戸大学)、伊藤隆郎(神戸大学)、岩井俊平(龍谷大学)、井上陽(相愛大学)、影山悦子(奈良文化財研究所)、上枝いづみ(金沢大学)、杉山雅樹(京都外国語大学)、田中悠子(ロンドン大学)、Erika Forte(Austrian Academy of Sciences)、小倉智史(東京外国語大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	3	12	1	5	4	2	90	2	45	15	15
国立大学	4	5		1			40		15		
公立大学											
私立大学	6	9	1	2	2		42				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関											
民間機関											
外国機関											
その他	1	2					4				
計	14	28	2	8	6	2	176	2	60	15	15
		(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)	1		0	
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)	0		0	
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	11		6	
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)	1		1	
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	0		0	

本年度発表されたインパクトファクターを用いることが適当ではない分野等

雑誌名	掲載 論文数	掲載 年月日	論文名	発表者名
東方学報 94	27	R1.12	フロンティアと驚異	稲葉穰
敦煌學 36	10	R2.8	融通文理，一以貫之：二十世紀初期魏思納（Julius Wiesner）庫車、和闐出土古紙研究撮述	<u>慶昭蓉</u>
Buddhism in Central Asia I: Patronage, Legitimation, Sacred Space, and Pilgrimage	11	R2.4	Images of Patronage in Khotan	Forte, Erika
Iran and Central Asia in the First Millenium: Continuity and Change from the Pre-Islamic to the Islamic Period	12	R3.3	Xian temples of the Sogdian Colonies in China	<u>影山悦子</u>
西南アジア研究 90	4	R2.6	ガンダーラの石製小皿と工人集団	<u>岩井俊平</u>
The Global Connections of Gandharan Art	10	R2.10	Buddhist temples in Tukharistan and their relationship with Gandharan traditions	<u>岩井俊平</u>
メトロポリタン史学 15	5	R2.12	ムガル帝国宮廷における贈与儀礼とマンサブ制度	<u>真下裕之</u>
NTM Zeitschrift für Geschichte der Wissenschaften 28-3	8	R2.7	Transmission of the “World” : Sumeru Cosmology as Seen in Central Asian Buddhist Paintings Around 500 AD	檜山智美

佛教藝術 5	5	R2.9	敦煌莫高窟第 285 窟西壁 壁画に見られる星宿図像 と石窟全体の構想につい て	檜山智美
Iran and Central Asia in the First Millenium: Continuity and Change from the Pre-Islamic to the Islamic Period	12	R3.3	Central Asia in the eighth century: Wukong's itineraries between China and India	稲葉穰

11. 費目の 30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

状況の推移を見ながら、オンラインによる史料会読と対面式による研究報告を並行して行うという方向で研究を進める予定である。特に史料会読は予想以上に順調に訳注原稿の作成が進んでおり、これを取りまとめる作業をも行う。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度末までに作成できた資料の訳注について、東方学報等での成果公開を計画している。